
イサム・ノグチともう一つの近代日本彫刻史 ——笹村草家人、新発見英文資料より——

福江良純(北海道教育大学)

本研究は、彫刻家笹村草家人がイサム・ノグチに手渡した手書きの英文小冊子を軸に、当時の日本彫刻の実像がどのようにノグチへ伝えられようとしたのかを論究する。草家人はノグチと大戦を挟んで20余年に及ぶ親交があり、昭和6年に来日したノグチを日本美術院展に案内した他、昭和25年の再来日の折も、5月と7月の2度にわたって、東京藝術大学石井鶴三研究室の諸氏との交流の機会を設けるなどした。今般発見された『記念のために』と題された小冊子は、イサム・ノグチ財団(ニューヨーク)のアーカイブに保管される1950年代の資料の一つで、その実在の有無も含め、永らく所在が不明だったものである。

笹村草家人は、荻原守衛によって開拓された日本近代彫刻が成熟を迎える、昭和期の日本を代表する彫刻家の一人である。文筆家の家系に育った彼は、知性豊かで洞察に鋭く、彫刻芸術に関する独自の論説で存在感を示した。また、荻原の系譜を自任する石井鶴三が東京美術学校教授に迎えられた際には研究室の助教授として着任し、身近に接した師の言葉をよく記録した。

草家人の功績は、近代彫刻の原理を師である石井の顕彰を通して世に示そうとしたことにある。「碌山、光太郎から鶴三、武四郎に至る少数の作家が一系をなすことは一般には十分気付かれ居らず、又名称もない」、そう語る草家人は、彫刻家としての「造型的」な観点から、近代彫刻についての見解を彫刻史上に構築しようとした。彼にとって近代は、その発祥であった西洋との対比が意識されており、日系アメリカ人であるノグチとの親交は、日本における「ほんとうの彫刻」が、世界に通じるものであることを問う貴重な機会となっていた。

草家人は、彼らの再会に合わせて小冊子英文原稿を入念に準備し、巻末にはノグチに宛てたカタカナ表記のエッセイを付加している。英文の前半には、当時の日本彫刻界に想定される、系統の異なる4つの彫刻家グループが挙げられている。これは、一般にも語られる近代日本彫刻の2つの潮流に関し、その技術的な根拠を示すものとなっているが、ラグーザに始まる“Academicians”に対して、ロダン、荻原の意を酌む系譜を“Cubists(you said)”として括るところに特色がある。それは、近代造形の系譜が石井をもって「ロダン以後」の新境地に到達したという認識のあるため、そこにノグチに伝えられた主張の核心がある。英文の後半では、文学的観念を脱した彫刻が、「立体」それ自体の呼び覚ます「感動」に依ることを実証的に試みた制作事例として、石井鶴三「木彫島崎藤村像」の制作工程が詳細に解説されている。

冊子の末尾、草家人は、自分に出来たことは石井鶴三の彫刻を見せることだけだったと、率直な心情を吐露している。ここには、石井の仕事の内に確信された近代彫刻の原理が、言説を超えて「キュビズム」としてノグチと共有された事実があり、それは近代日本彫刻の史的理解に対する大きな一投石ともなるだろう。